２．入院患者調査

（1）回答状況について 問1

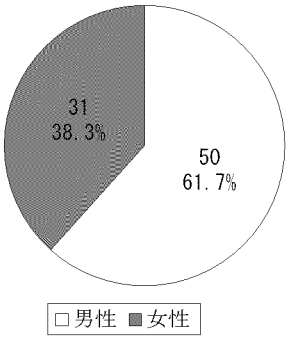
調査票の回収は、精神科病床を有する113箇所の医療機関に協力依頼し13施設、81件の回答を得た。

（2）高次脳機能障害者について

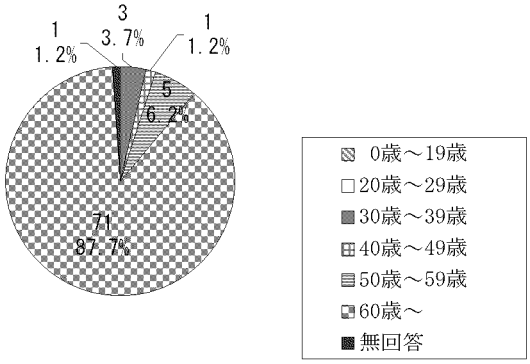
１）性別と年齢 問2、問3

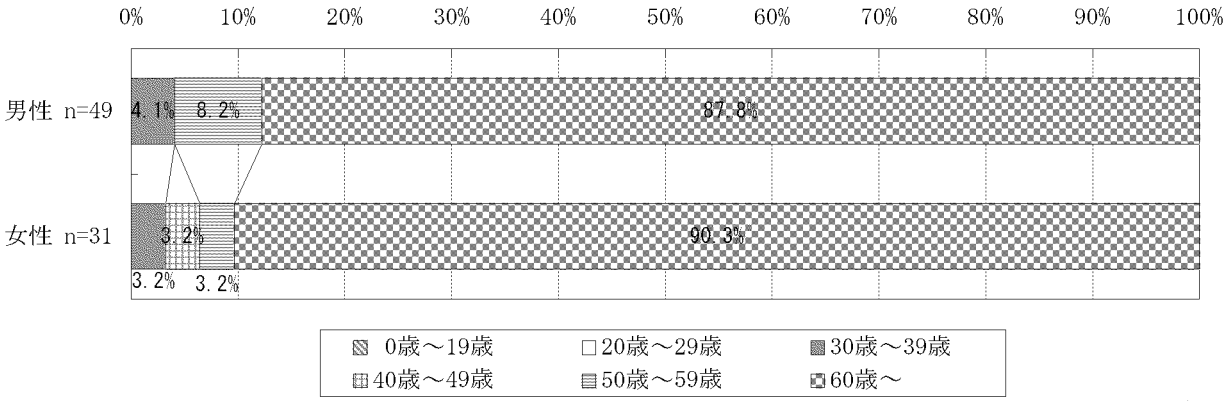
性別は男性が50人（61.7%）、女性が31人（38.3%）であり男性の方が多かった。
年齢別にみると60歳以上が71人（87.7%）で多く、男女別にみても同様であった。また、平均年齢は69.7歳であった。なお、29歳以下についての回答はなかった。

■性別 n=81



■年齢 n=81

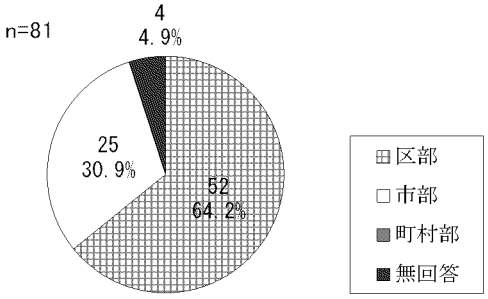




無回答：1

２）現住所 問4

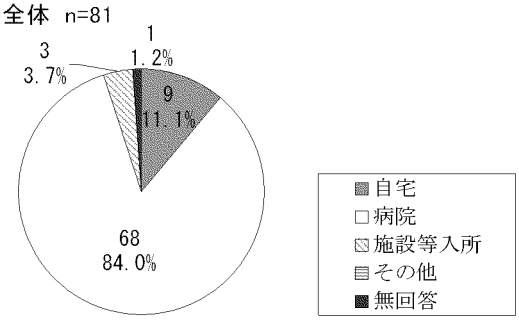
回答者を地域別にみると、区部が一番多く52人（64.2%）であった。市部は25人（30.9%）で、町村部は回答者がいなかった。



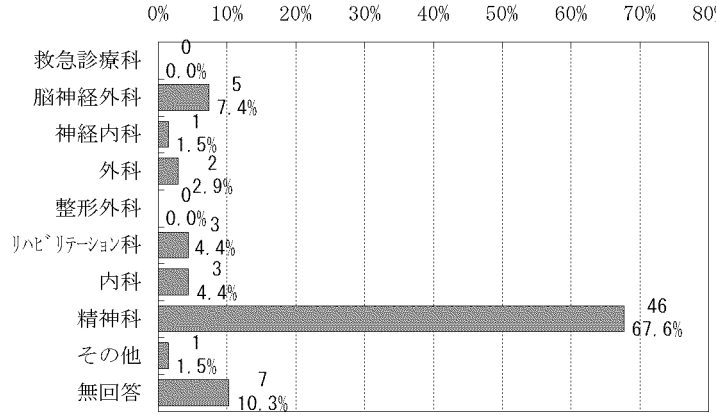
３）入院前の所在 問5

入院前の所在は病院が68人（84.0%）で一番多く、次いで自宅が9人（11.1%）であった。

■全体 n=81

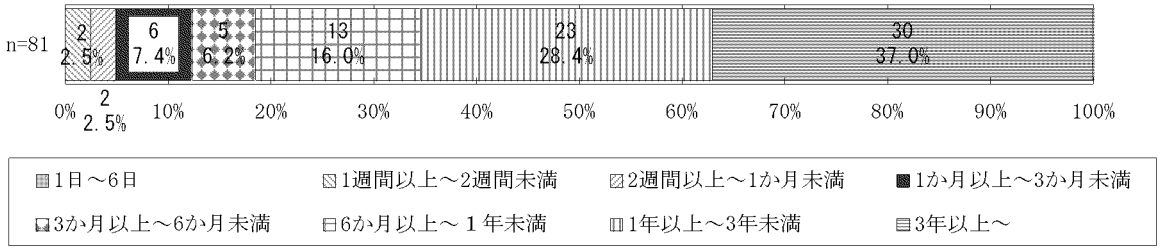


■病院内訳 n=68 ※複数回答



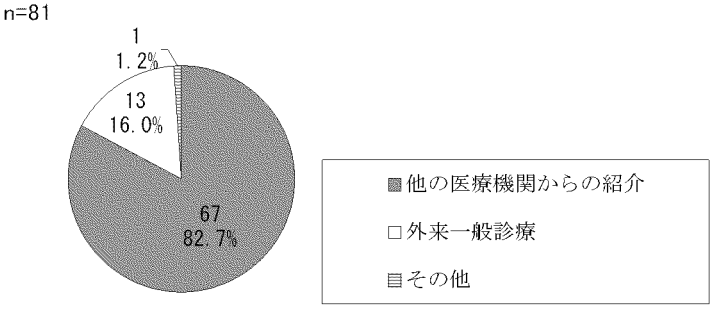
４）入院期間 問6

入院期間は3年以上が30人（37.0%）で一番多く、次いで1年以上～3年未満が23人（28.4%）であった。



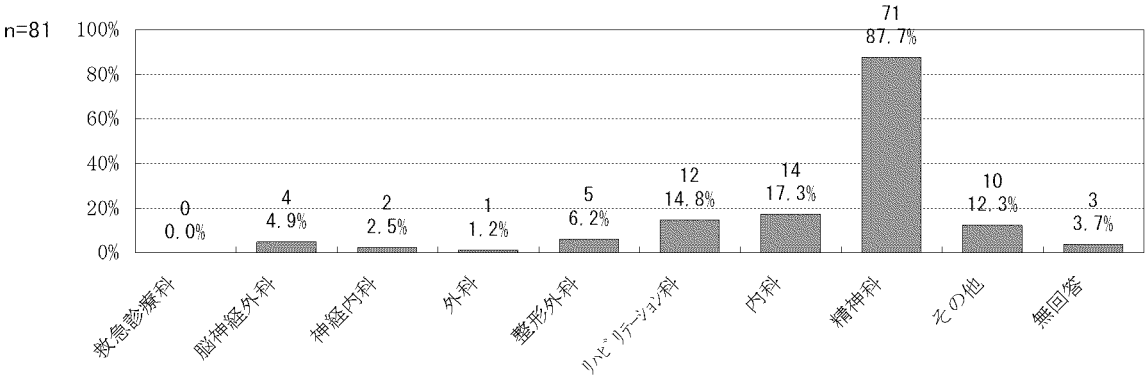
５）入院経路 問7

入院経路は他の医療機関からの紹介が67人（82.7%）で一番多く、次いで外来一般診療が13人（16.0%）であった。



６）入院期間中に受診した診療科 問8

入院期間中に受診した診療科は精神科が71人（87.7%）で一番多く、次いで内科が14人（17.3%）であった。

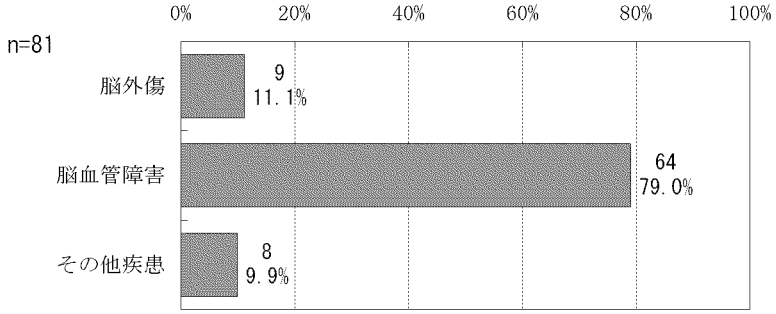


※複数回答

7）高次脳機能障害の原因疾患 問9、問10

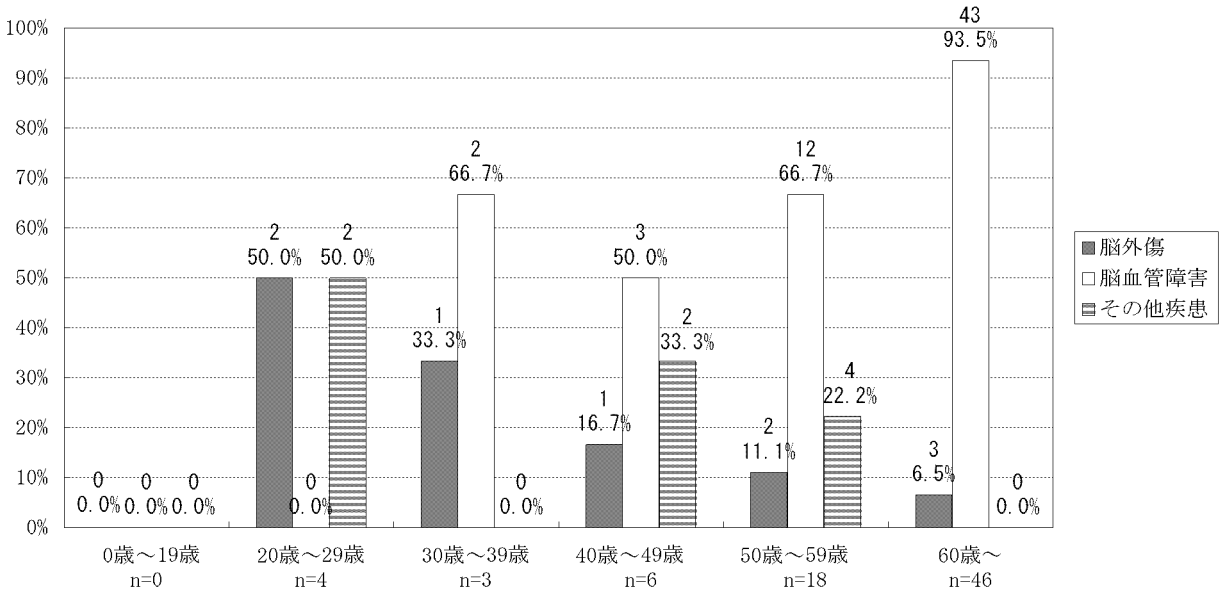
①高次脳機能障害の原因疾患

高次脳機能障害となった原因疾患は、脳外傷が9人（11.1%）、脳血管障害が64人（79.0%）、その他疾患が8人（9.9%）であり、脳血管障害が一番多かった。



②年齢別の原因疾患

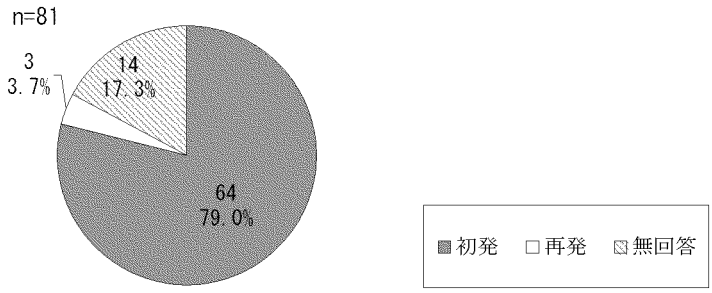
年齢別の原因疾患をみると、30歳以上では脳血管障害が多かった。平均発症（受傷）年齢は60.7歳であった。



※原因疾患が複数の場合は、それぞれに人数をカウントしている。　※複数回答

③初発・再発

高次脳機能障害に至った原因である脳損傷の発症（受傷）は、初発が64人（79.0%）、再発が3人（3.7%）であった。



８）発症（受傷）時の意識レベル 問11

①JCS

JCSは、回答があった10人のうち軽度が5人（50.0%）、中等度が1人（10.0%）、重度が4人（40.0%）であった。（無回答：71）

JCS：Japan Coma Scaleの略で、意識障害の程度を評価する尺度である。数値が少ないほど良好である。ここでは、1から3を軽度、10から30を中等度、100から300を重度の意識障害として分類する。
※詳細は、下表を参照

②GCS

GCSは、回答があった12人のうち軽度が7人（58.3%）、中等度が2人（16.7%）、重度が3人（25.0%）であった。（無回答：69）

GCS：Glasgow Coma Scaleの略で、意識障害の程度を評価する尺度である。数値が高いほど良好である。13点から15点は軽度、9点から12点は中等度、3点から8点は重度の意識障害とされている。
※詳細は、下表を参照

③意識状態

意識状態は、回答があった12人のうち昏睡が6人（50.0%）、錯乱が1人（8.3%）、清明が5人（41.7%）であった。また、半昏睡の方はいなかった。（無回答：69）

④意識障害持続時間（開眼し相手がわかるまでの時間）

意識障害持続時間は、昏睡なしが2人であった。（無回答：79）

＊＊＊意識レベルの評価スケール＊＊＊

JCS Japan Coma Scale	Ⅰ．刺激しないでも覚醒している状態（1桁で表現）	1	大体意識清明だが、今ひとつはっきりしない
		2	見当識障害がある
		3	自分の名前、生年月日が言えない
	Ⅱ．刺激すると覚醒する状態（刺激をやめると眠り込む）（2桁で表現）	10	普通の呼びかけで容易に開眼する「合目的な運動（例えば、右手を握れ、離せ）をするし言葉も出るが間違いが多い」
		20	大きな声または体をゆさぶることにより開眼する（簡単な命令に応ずる。例えば離握手）
		30	痛み刺激を加えつつ呼びかけを繰り返すと辛うじて開眼する
	Ⅲ．刺激しても覚醒しない状態（3桁で表現）	100	痛み刺激に対し、はらいのけるような動作をする
		200	痛み刺激で少し手足を動かしたり、顔をしかめる
		300	痛み刺激に反応しない

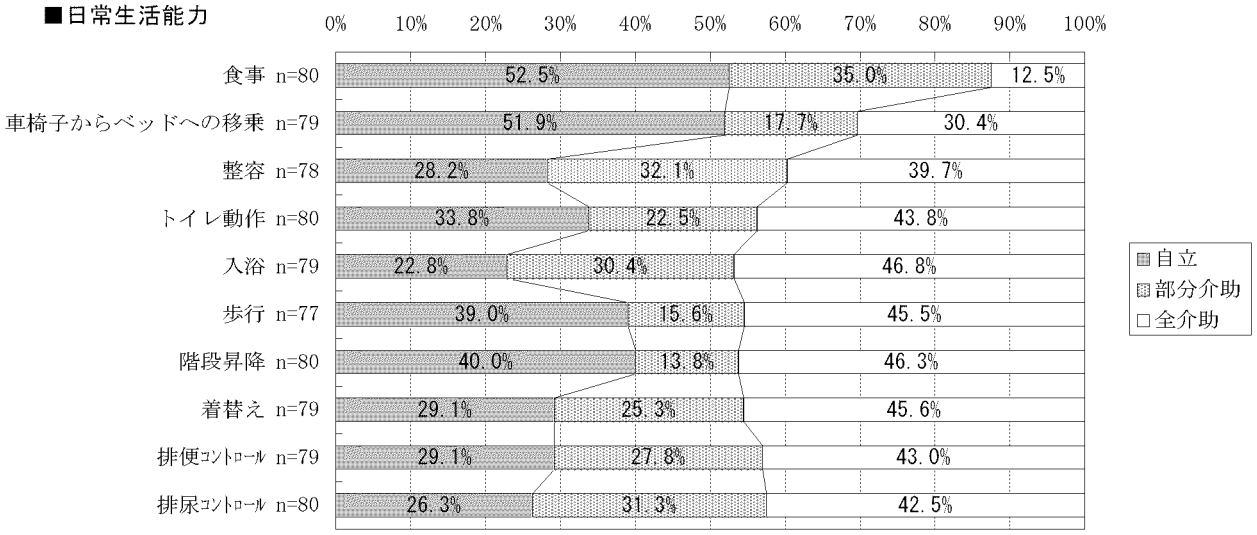
GCS Glasgow Coma Scale	E.　開眼反応	4点	自発的に開眼
		3点	言葉により開眼
		2点	痛み刺激により開眼
		1点	開眼しない
	V.　言語反応	5点	見当識あり
		4点	錯乱状態
		3点	不適当な言葉
		2点	意味の通じない言葉
		1点	発声がみられない
	M.　運動反応	6点	指示に従う
		5点	刺激を払いのける
		4点	逃避的屈曲
		3点	異常屈曲反応
		2点	異常伸展反応
		1点	全く動かさない

９）現在の状態 問12

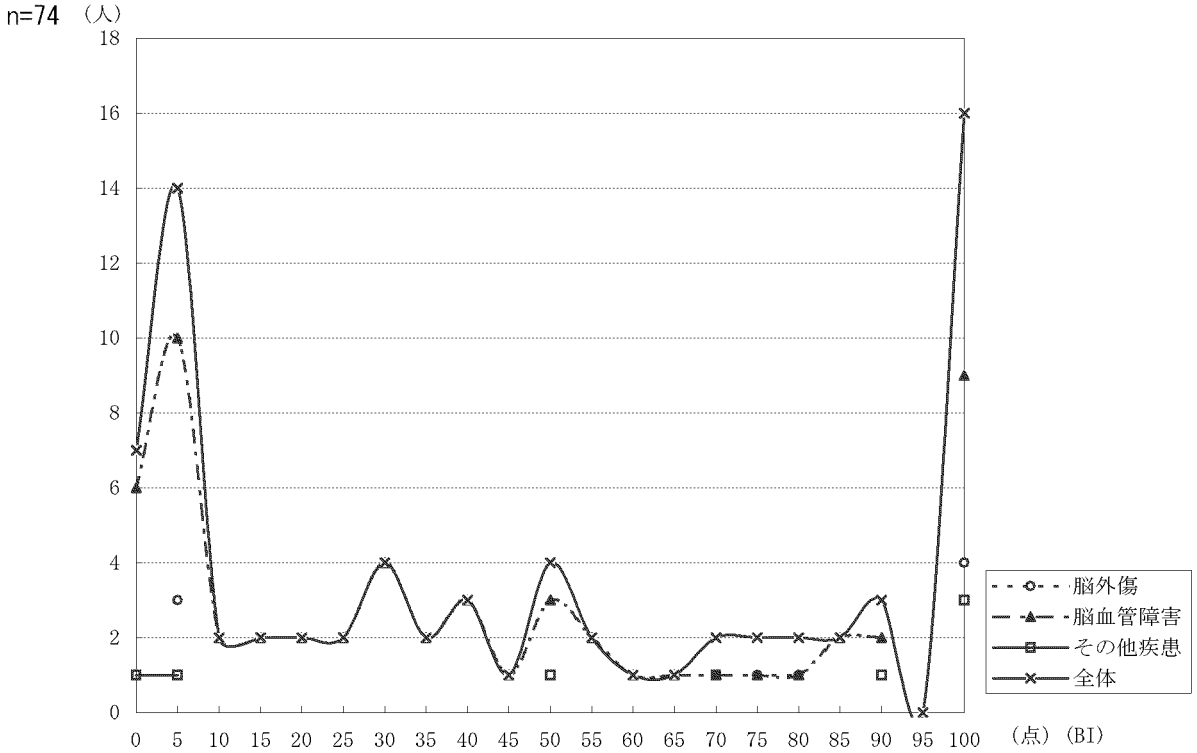
①日常生活能力

日常生活能力は、食事、車椅子からベッドへの移乗については、約半数が自立しているが、その他の日常生活においては半数以上が部分介助もしくは介助を必要としていた。また、バーセルインデックスは0～55点が45人（60.8%）、60点～75点が6人（8.1%）、80点～100点が23人（31.1%）であった。

■日常生活能力

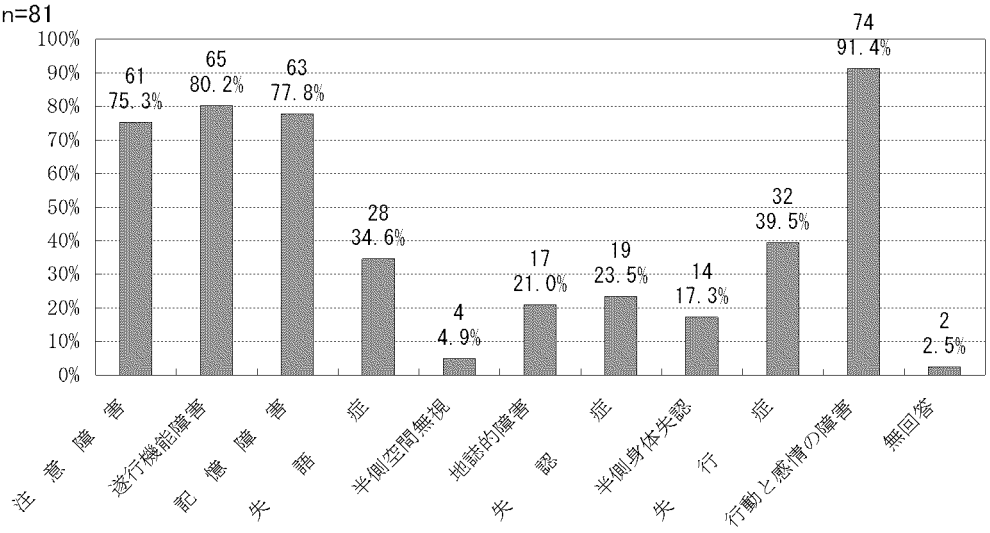


■バーセルインデックス（BI）



②高次脳機能障害

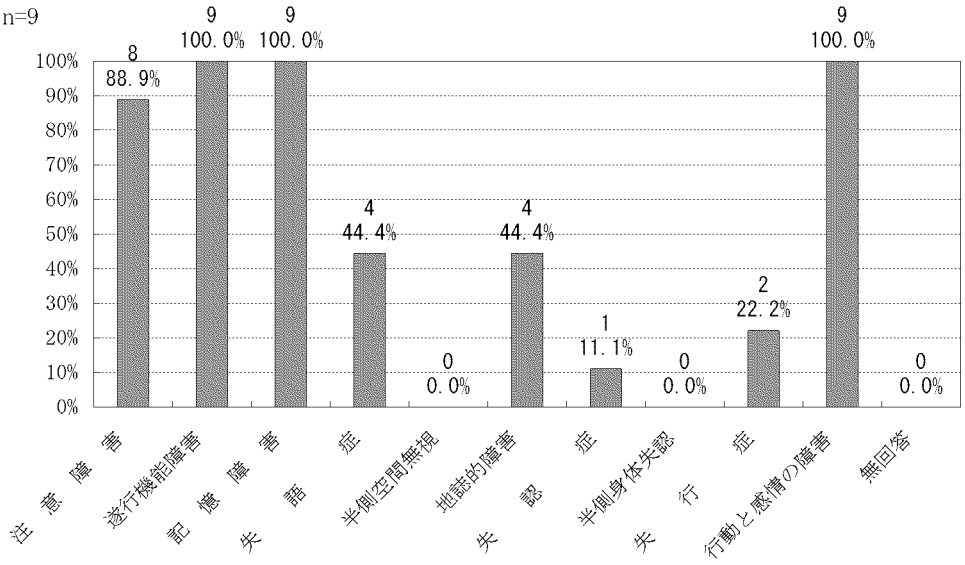
高次脳機能障害の内容として、行動と感情の障害が74人（91.4%）で一番多く、次いで遂行機能障害が65人（80.2%）、記憶障害が63人（77.8%）、注意障害が61人（75.3%）であった。



※複数回答

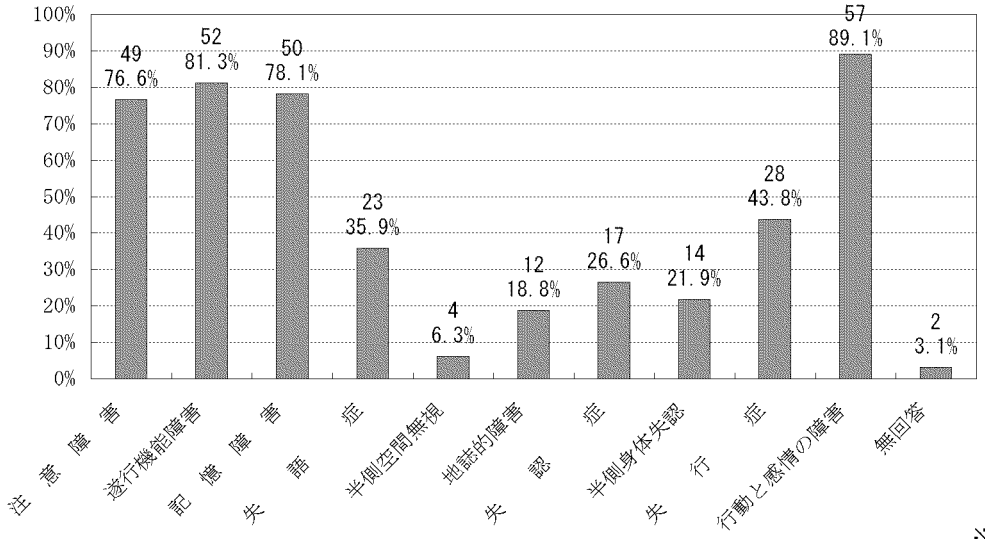
また、発症（受傷）の原因疾患別に各障害を比較すると、脳外傷では遂行機能障害、記憶障害、行動と感情の障害、脳血管障害では注意障害、遂行機能障害、記憶障害、行動と感情の障害が多かった。

a．脳外傷　n=9



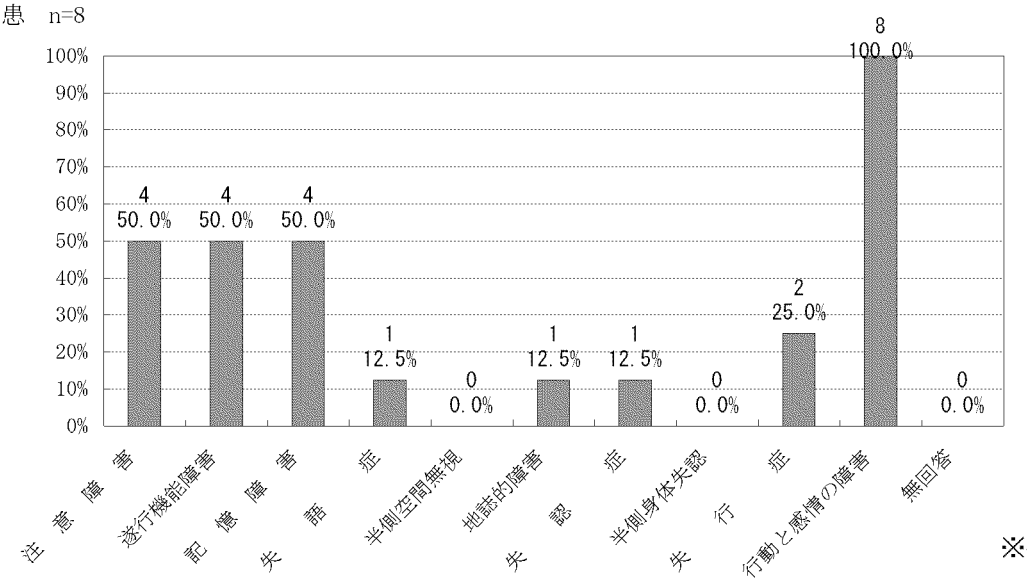
※複数回答

b．脳血管障害　n=64



※複数回答

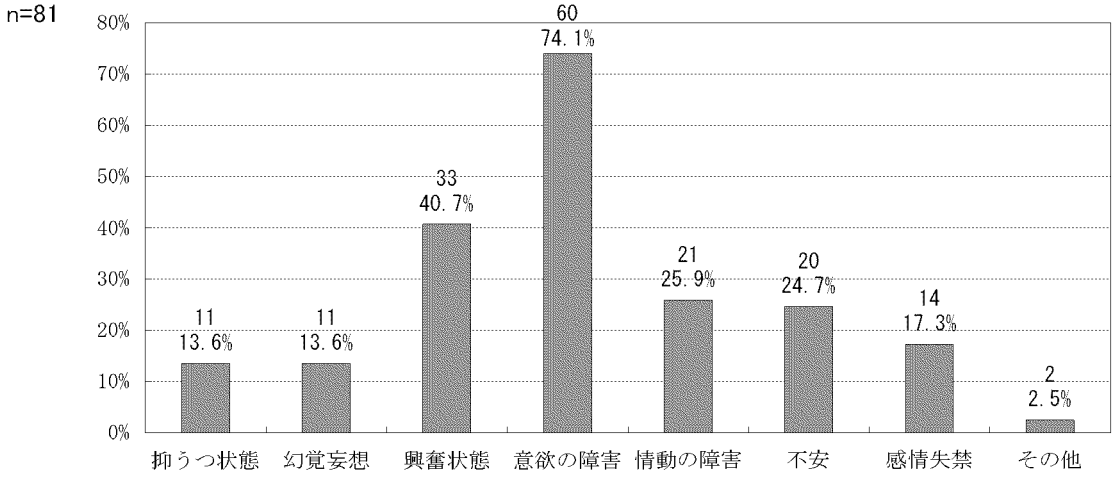
c．その他疾患　n=8



※複数回答

③行動と感情の障害

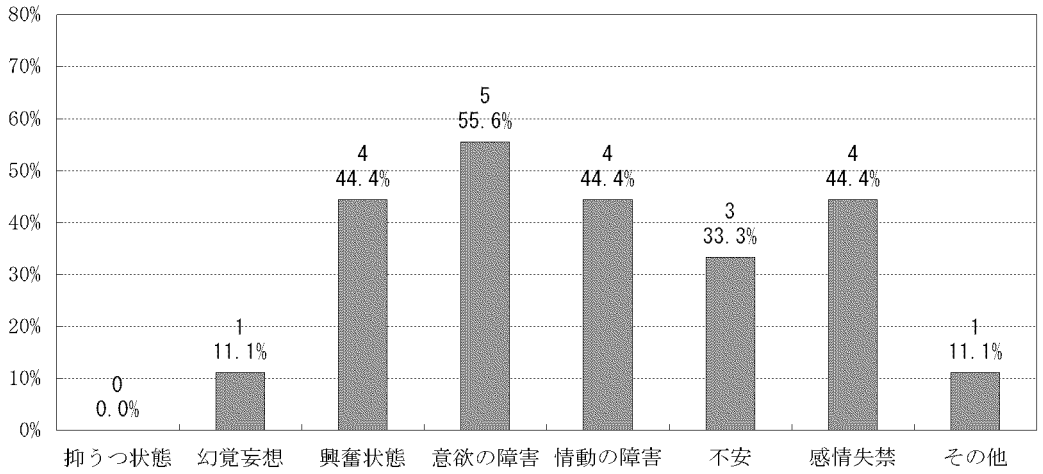
行動と感情の障害の内容として、意欲の障害が60人（74.1%）で一番多く、次いで興奮状態が33人（40.7%）であった。



※複数回答

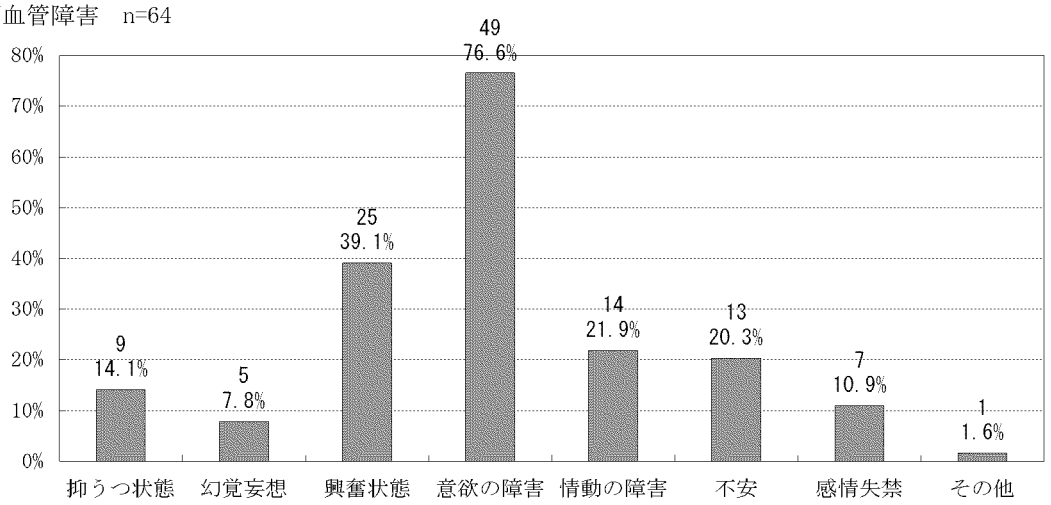
また、原因疾患別にみるといずれの場合も意欲の障害が一番多かった。次に多かったのは、脳外傷では興奮状態と並んで情動の障害、感情失禁、脳血管障害では興奮状態、その他疾患では幻覚妄想であった。

a．脳外傷　n=9



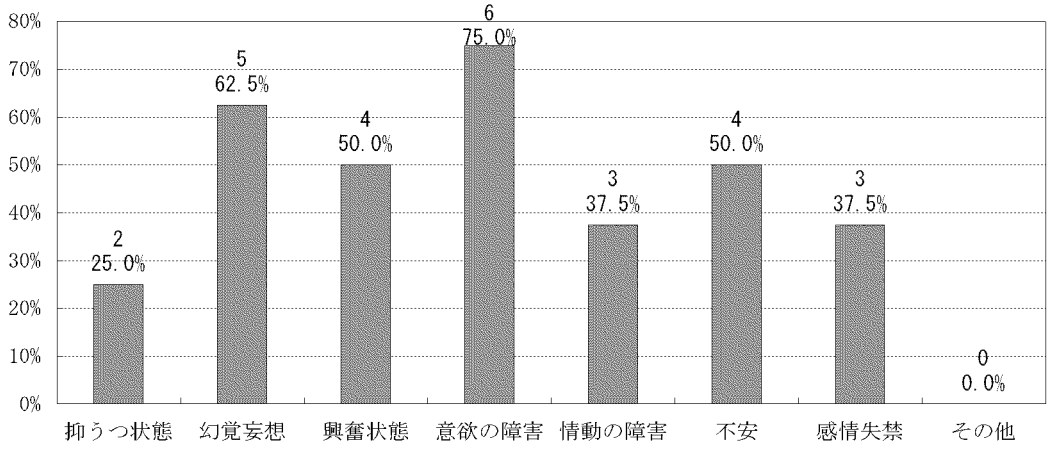
※複数回答

b．脳血管障害　n=64



※複数回答

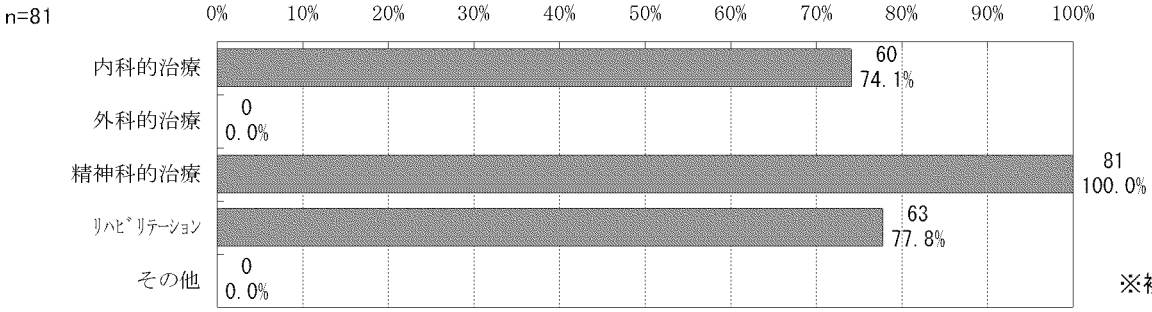
c．その他の疾患　n=8



※複数回答

10）入院中の治療 問13

入院中の治療は、精神科的治療が81人（100.0%）で一番多く、次いでリハビリテーションが63人（77.8%）であった。



※複数回答